龍門

題字は石野忠氏の揮毫

発行者
関東小山田会
（鹿児島県加治木町小山田を愛する会）
創刊号（第１号）
平成 21 年 4 月 25 日

龍門（関東小山田会・会報）創刊にあたって

関東小山田会　会長　　二之方 信良

昨年、前任の前田博さんから関東小山田会の会長を引き継ぎさせて頂きました。十年にもなろうかという伝統ある会ですので身の引き締まる思いですが、皆様のご支援を頂戴しつつ微力ながら精一杯努めさせて頂きたいと思っております。

少しばかり自己紹介をさせて頂きますと、小学校五年生までは父の勤務の関係から栗野（現在の湧水町）、といいましても栗野岳の山のなかですが、そこで過ごしまして、父の退職を機に母の生まれ故郷である小山田に帰って参りました。それから社会人となるまで通算で十年余り、小山田で過ごさせて頂きました。そういうわけで栗野岳あるいは小山田の山や川、出来事などは、私の幼いころから少年時代の原風景としていつも懐かしく、昨日のことのように思い出しております。

さて、関東小山田会の集いも今回が十回目の節目となることから、何か記念となることができないか、諸先輩や世話役をお願いしている方々とご相談した結果、ささやかながらも会の歴史を記録にとどめると同時に、会員相互あるいは郷土の方々との交流の場となる新聞的なものはどうか、これだったら作業的にも経済的にも何とかなるのではないかということになったものです。出来上がった創刊号は文字通りささやかなものですが、これを第一歩としてできるだけ長くまた大きく育てて、会員相互あるいは郷土との架け橋ともなればと思います。

最後になりましたが、関東小山田会の益々の発展と会員の皆様方のご健勝をお祈りして創刊のご挨拶とさせて頂きます。

（「龍門」の発行にあたって、題字をお願いしました石野忠さんに心より御礼申し上げます。）

連載「関東小山田会」創設の経緯（1）

第四代会長
石野　忠

一、はじめに

平成十二年四月一日「グランドアーク半蔵門」に八十名のご参加をいただき設立総会を開催して以来、早十年の歳月が過ぎてしまいました。この間に、初代会長を勤められ本会の設立に多大のご尽力をいただきました川原勝氏をはじめ、福薗昭男氏・藤野章氏等など多くの会員が逝去され故人となられました。

「十年一昔」と申しますが、現在の役員は草創期の状況を知らない人がほとんどで「小山田会誕生のいきさつ」を記述して欲しい、との要望があり起筆した次第です。小生も古希を過ぎ、記憶が定かでないところもありますが、昔の記憶を思い起こしながら書くことと致します。

二、「会」設立の動き

最初に「小山田会を設立しよう」という動きがあったのは、今から半世紀も昔の事です。当時の時代背景は、政治的には安全保障条約の批准を巡り反安保闘争が激化し、昭和三五年六月十五日国会構内に乱入したデモ隊と警官隊の排除活動の中で女子学生一名が圧死した動乱の時代でした。

一方、経済的には高度経済成長期への過渡期であり、都市への人口集中が始まり「集団就職列車」は、井沢八郎の「ああ上野駅」に歌われ大ヒットした時代で、小山田からも上京したが不慣れな都会生活に馴染めず挫折して帰郷する者もあり、激励を目的として設立が話し合われた、と聞いております。この計画では、猪目政彦氏を会長に、川原勝氏・石野清海氏等が会長を補佐することで構想は決まり、さらに、追い風となったのは大相撲の鶴ヶ嶺の活躍でした。

その活躍はテレビ放映され、小山田出身者の誇りでもありました。その構想は出来ても、実際に名簿の収集や事務作業をするには皆忙しく事務局を勤める人がいなくては正に「絵に描いた餅」でした。月日が経つほどに熱も冷め、仕事も多忙を極め、何時しか雲散霧消してしまった、と言うのが本音のようです。

（次回は、設立の準備状況をお伝えいたします。）

第10回　関東小山田会
平成21年4月25日
三州倶楽部にて開催

ふるさとは遠きにありて思うもの

ふるさと便

上村　和巳

私も昭和四四年四月に上阪して昭和五六年小山田に帰ってきました。あれからもう二八年が過ぎようとしています。長男が小学校に上がる時に帰ってきたのです。

高校を卒業するまでは、鹿児島県姶良郡加治木町とは、世界の中でもまた日本の中でも、本当に名もない片田舎と思っていました。しかし帰ってきてから、鹿児島県は戦国時代から島津藩として一目置かれ、明治維新では国造りの立役者がいたところ、その鹿児島の中でも加治木町は島津義弘ゆかりの地で、明治十年には一時県庁が置かれていた歴史ある誇れる町だったのです。そして史跡名勝は百二十を数え、いまでこそ市町村合併で県内五番目になりましたが、今までは鹿児島市よりも多く、県下では一番であったのです。文之和尚は、当時の国文学の第一人者で、日本一の学者が加治木にいたのです。

小山田は平安時代の末期、加治木氏から分家した資頼が最初に小山田姓を名乗っていることから、それ以前から「小山田」という地名があったと考えられています。近年、国、県の補助事業で「小山田地区むらづくり委員会」が設置され、これまでのむらづくりが評価され、鹿児島県のむら作り県知事賞や九州農政局長賞をもらうなど、加治木町の下場からも「小山田は元気だ」という評価を得ています。空港も近く、東京に最も近い場所でもあります。「自分のふるさとに誇りが持てる」こんな人たちが住む小山田にしたいと、有志たちは語っています。二十一年度、ふるさと祭りや朝市の再開、小山田音頭の普及、カレンダーや蛍の里作りなどの活動を通じ、次世代へつなぐ人材育成も手がけて行きたいと、焼酎を飲み交わしながら、熱く語り合っています。小山田の新聞作りも検討したいと思っています。次は、逆に関東小山田会の活動を、掲載することになるかも知れませんね。十周年のお祝いと会員の皆様の、ご健勝をお祈り申し上げます。

小山田ふるさと祭り

■■■　プロフィール　■■■

小山田にお住まいの上村さんは水道工事業をされるかたわら、町おこしグループ「小山田を語る会」会長や「かぢき披露芽隊」隊長を務めるなど、加治木の伝統や文化、風物などの紹介に活躍されています。

会員消息

返信葉書で寄せられたコメントの一部を敬称略にてご紹介します。

☆御盛会を祈ります。
転居しました。
（船橋市・猪俣眞人）

☆夫の介護で毎日色々大変です。皆様はお元気で。いつもご連絡ありがとうございます。皆様方によろしくお伝え下さいませ。
（東京都中野区・岡本淑枝）

☆小山田会益々の御発展お喜び申し上げます。そして心より感謝申し上げます。（私も年をとりまして体調がこの春よくありません）
（国分寺市・川原順）

☆いつもありがとうございます。私も元気に暮らしておりますが、昨年転居致しました。家族の都合で私が留守にすることが出来ないので、大変残念ですがよろしくお願いします。
（京都府城陽市・斎藤智子）

☆お知らせを頂きありがとうございます。残念ながら今回は出席できませんが、多数の方々がご出席なさる事を祈っております。
（東京都杉並区・薗田久美子）

☆楽しみにしておりましたが、他の用事と重なって行けません。残念ですが皆様によろしくお伝え下さい。（市川市・田口キヨ子）

☆4月26日から帰鹿の予定があり出席できませんが、又お逢い出来ることを楽しみにしています。
（東大阪市・竹林淳子）

☆体が健康でないので失礼します。ハガキありがとうございます。皆様もお体を大切にして下さいませ。
（相模原市・靏米子）

☆食事もおいしく食べられ気分も良いのですが、足の方（歩くのが）むずかしい（乗り換え等）ので、家でカラオケやプロ野球でも見て楽しみたいと思います。
（千葉市若葉区・畠中睦美）

☆体調不良の為（高血圧で入院）
（君津市・秀島トミ子）

☆体調不良に付き欠席させて頂きます。小山田会のご盛会を心より祈念致します。
（市川市・古江哲夫）

☆今春入学する生涯大学の登校日と重なりましたので欠席とさせて下さい。皆様によろしく。
（市原市・前田幸雄）

☆体調悪く出席できません。みなさまによろしく。盛会を祈ります。
（町田市・本山彦一）

☆昨年12月に鹿児島へ帰りました。桜島と錦江湾が毎日ながめられる場所で故郷を満喫しています。関東小山田会の発展を祈念致しております。
（鹿児島市・森山道宏）

☆ご案内有難うございました。昨年8月帰鹿致しました。
（鹿児島県蒲生町・森山道壮）

原稿募集中！

これからは年間二回くらい発行できたら良いなと思っております。ぜひ会員の皆様方から多くのご投稿をお待ちしています。小山田の思い出、小山田のニュース、最近の状況、旅の思い出、などなど何でも結構です。素敵な写真等を添えて頂くと助かります。

下記あてにお送りください。

〒212-0057
川崎市幸区北加瀬 3-15-26
（事務局）新冨　征人　まで

次号の予定

第十回関東小山田会の様子等を中心に発刊します。

■■■編集後記■■■

初めての試みですが皆さんのご協力を得て少しずつ充実した会報をお届けできるように努力したいと思います。会員の皆さんから、ご意見やご要望等をお寄せいただくことが励みにもなりますので、よろしくお願い申し上げます。（柚木）